

の關係親密となり政治上商業上の聯合をなすの結果を生したること前に述べたる
 か如し若し日本が故障を言立てたらんに或は少くも今日の英國と支那とが政治
 上商業上の聯絡より得る所の利益の半分位は日本に得らるべかりしやの念を起さ
 るを得ざるなり之と同じく今日の哥老會事件の場合に於ても目下の問題は歐羅
 巴各國聯合して支那政府に對し償金及び黒龍江を自由に通航することを要求し未
 た落着せざる場合あるを以て之に對し東遼の主人たる日本は如何なる政策を取ら
 ざる可らざる歟は亘文島事件に對するの場合と毫も異なることなければなり左れ
 は日本は此際歐羅巴各國と支那との間に立ち仲裁を試み東遼の主人たる實を立て
 ざる可らず現に哥老會の亂暴したる爲め歐羅巴人は損害を受けたること事實なる
 以上は支那は是非其損害に對して償金を拂はざる可らざるなり故に支那が之を拂
 はざるは不正にして歐羅巴各國が要求するは正當なり然れども英國が揚子江の自
 由通航を望むは不當の請求と云はざる可らず何と云へば凡そ河川の公法上に於け
 る關係は甚だ大がしきものにして特に揚子江の如き大河に就ては其の真中たけは
 支那の支配に屬せしむべきとの口實も出で来るの恐あり今英國が此亂暴を機會とし

と自由通航を請求するは固より不正の舉なるが故に勿論之れを拒絶し得べきもの
 なり故に日本は此中間に立ち雙方の不正を矯め正しき所に就て落着せしむるなり
 是は是に於てが始めと東遼主人たるの實あるべし又之れよりして將來支那と相提携
 して利益を見るに至るべし而して歐羅巴人に向ては日本は正義を重んずるの義勇
 心に當む如何にも東遼の主人たる國柄なりとの信用を得ることもなりはべし則ち
 亘文島の占領とは場合こそ異なれ歐羅巴洲と亞細亞洲の一國との間に立ち日本が
 東遼の主人たる實を擧ぐることは少しも異らされはなり
 斯の如く既往の問題たりとも議論をすれば將來に大なる利益ありと考ふるなり尙
 ど是れは他日十分に此の講究の結果が實地に活用せらるゝの時あることを確信す
 ればなり

第三 太島台湾の東洋の大勢に於ける位置(二月廿七日於東邦協會演說)

全世界の大勢上より推究するときは第二十世紀に於て太平洋即ち東洋が全世界に
 於ける政治上商業上の大劇場となりて活劇を演進せざるべからざること既に世
 人の認識する所なり而して活劇場となるに至らば必ずや其の大勢を左右するに足

ある點即ち其の主要となるべきの地あるものにして現今歐洲の大勢を觀るときは彼の歐羅巴諸國が爭點とする所のものは數多あるに非らずして唯一主要の點なることを知らん之を例せんに土耳其のコンスタンチノールは即ち各國が利害を有する所にして露西亞若し之を取らば露は忽ち歐羅巴全洲を席卷するの勢となり英國は爲に其富源たる印度に通ずるの航路を絶れんとの恐を生じ又佛蘭西は地中海に於ける權威を殺かるゝの慮りあり其他獨太利なり伊太利なりコンスタンチノールの存亡に就ては至大至重なる利害の關係を有せり故に露西亞はビートル帝が夙に政略を立てし以來コンスタンチノールを取て其の根據となして而して後ち歐亞二洲を席卷し亞米利加を蹂躪せんと欲し常に此地を覬へり此の如く一地を占むるときは歐羅巴の大勢を左右するに足るの主點あるものにして又彼の埃及の問題の如き拿破侖一世が英國を絶つには必らず其の富源たる印度との航路を遮斷せざるべからざるの政略を立てし以來埃及の興衰は英佛兩國の盛衰存亡に關する重大の問題なるを以て百年を経り今日と雖も此の問題は兩國が頻りに意を用ゐるの所なり故に歐羅巴以外の地即ち東洋の大勢上に於ても亦一の主點となるべき

の地あるものにして近頃全世界の問題となり來りし東洋次世紀に於て政治上商業上全世界の大演劇場たる東洋に對し此渦旋中に國する所の我日本人は必ず東洋の樞軸を扼し其の大勢を左右すべき地を探出して之を全然我手に入るゝの策を廻らざる可らざる即ち歐洲形勢上のコンスタンチノールの如き或は埃及の如き至要の處を探尋せざるべからざるなり然るに東洋大勢上の主點は現に之を把握し難る者あり而して今日何れの國が果して之を握れるや將た又將來其の主點は何處に轉着するやを探究するは甚だ面白き所の問題なり

初令日東洋の大勢上其樞軸を握れるの國は何處か即ち英國なり其場處は何處なるか即ち香港なり香港の地たる實に狭小にして東西僅に十一英里南北僅に二英里乃至五英里計り面積は廿九平方英里に過ぎず而して英國が香港を占取したる歴史を見るに千八百四十二年に始めて之を占領し翌千八百四十二年の南京條約にて終に英國の新屬に定めたり併して此狭小なる島のみにては軍備上頗る不安心なるを以て千八百六十年に至り更に北京條約にて香港の對岸の陸地を取るに至れり而して今其の位置を按ずるに恰も北緯二十二度十分より十七分の間あり又此島と新

得の大陸との距離を圖るに僅々一英里の四分の一に過ぎず又此島と其西の澳門との距離を圖るに四十英里なり故に此香港の港は凡十平方英里なり此港は自由港にして船渠を造り砲台を築き今日此港は嚴然たる一個の小英國たり諸英國は此香港を如何なる位置に据えしかを見るに之を兵路上且つ商賣上東洋の大勢を制すは東洋の本部となせり而して此の英國が此香港を如何に利用して東洋の兵權を握り居るか如何の力にて此兵權を維持せよかを調べ而して後ち始めて今日の問題に推移せざるべからざるなり

先多志を海軍の點より見れば支那艦隊と名づけ十九艘の軍艦を備へ居れり即ち甲鐵艦一艘二等巡航艦三艘三等巡航艦六艘一等砲艦五艘二等砲艦三艘通報船一艘なり其噸數は總計九千八百三十七噸を有せり次に陸軍は如何と雖れば兵の總數二十九百八十九人之を分すれば英國人の砲兵三中队二百五十三人工兵一中隊百五十九人歩兵一中隊一千三百八十八人印度兵砲兵四小隊主兵一小隊步兵八小隊此兵員千五百七十八雜兵を加へて總計二千九百八十九人其外巡査六百六十九人此他海軍に於て尙ほ兵船四艘水雷船四艘其噸數八千七百八十三噸をも備へり然れども東洋の形勢

殊に其面目を改むるより以上の兵力にては到底安心すべからず因て益之を強ふべきを謀らざるの念より昨年の末には印度の兵一大隊を香港に増遣すべきことを英國の國會は決議したるに英に對し英國は此海陸軍の力に依りて東洋の大勢を控制せんと欲するを懐けり尙一昨年來余が英國に居りし頃より英國は此東洋に派遣せる軍艦は進々老朽に屬するを以て更に新軍艦を代へて單に形のみならず其實を擧げんと欲し鋭意其の改革に従へり且つ昨年末歩兵一大隊を増遣したるが如きも益東洋の形勢を重要視し何處までも香港に據て其大勢を扼せんとするの念慮あるを察すべし而して凡そ東洋の大勢を押へて其霸權を握らんとする時は其霸權の實たる商業權を執らざるべからず故に單に兵略上ののみより香港を視ずして東洋の商權をも香港に於て押へんとすることは英國の最も勤むる所なり今や東洋商業の中心點は既に上海に赴くと雖も彼の香港の商賣の盛んなるとは現に一昨年比二千萬磅の取用なきを見て知るべきなり毎年此港に入りし所の船舶は千八百八十八年の統計に依るに凡六百四十萬四千噸にして今試に此噸數を千八百四十二年即ち英國が此香港を取りし年本國の倫敦に入りし船舶の噸數に比較するに却て香港に

入る數多きに居る是れ蓋し英國が東洋商兵の兩權を香港に於て把握せんと勉むる
 所の結果より生ずるものなり是れに就き一の話柄あり前の香港知事は余に香港の
 報告に手東を添えて曰く此報告書を貴殿に御送り申上候に付ては近五十年間に我
 英國が刻苦の下に成就せし香港を御一覽下され度候と千八百四十二年より今日ま
 で漸く半世紀を経ざるに香港の進歩は實に著るしきものなり英國が香港を占取せ
 し當時の有様如何を顧るに此島は實に小島にして其必要の土地とも人は見さる
 しなり且つ無候極めて薄しく今日の香港は英人の骨を以て築きたるものと云ふべ
 し何となれば香港を開きし當初は第一に飲料水惡く英國人か之が爲に斃死せしも
 のも數塞に夥しければなり是に因て之を觀るに商賣上若くは兵略上東洋の實權を
 把握せんとするは容易の業にあらず多數の人命を損し夥多の財を棄てされば容易
 に成就し能はざるものなりさて英國は斯の如く力を盡し其所志を遂げんことを勉
 るが爲して將來東洋の大勢は依然此處にて把握せらるべきや否やといふに至るは又
 此本の問題なりとす

とされは歐羅巴より東洋に来るには初め喜望峯を廻つて阿非利加を経ざるべから
 ざりしと今世紀蘇士運河の開通より印度洋を経過するに至り千八百二十一年英國は
 新嘉坡を取て其東洋に来るの足掛となしたり然るに東洋商賣の中心點として尚
 北東の地ならざるべからざるを以て遂に千八百四十二年に香港を取るに至りし
 たり爾後千八百四十六年にはボルネオの北ランアンを占取せしと雖も尚は東洋
 の商賣の中心點又東洋の大勢の喉首とすべき處は今一步東北ならざるべからざる
 べしと英國は上海の海口を奪はんと欲し常に其の機を窺へり此事は英國の外交書
 類に「讀せば直接に之を書き顯はさずと雖も英國は此に着眼せざるべからざるこ
 とは外交官の報告書に在る所に於て自ら明かならん然るに上海には其の中心點を
 置くべからざるものあり何ぞや若し英にして上海を取らば支那の貿易を妨げざる
 べからざるを以てあり因て支那の感情を害ふとなく又東洋の形勢を北方に於て扼
 せんとするの考より去る千八百八十五年に彼の巨文島を占領するに至りたり蓋し
 巨文島占領の事は彼のチャールズが考案に出でし政略にして其後チャールズ
 スダルトは歐羅巴の大勢なる書を著し論じて曰く如何にして東洋大勢の主點

は尙ほ北上するならん故に巨文島は戦時に當ては露西亞が浦鹽斯德を發し日本海より出で南方なる英國の植民地に向ふ航路を控制し進んで一朝浦鹽斯德にて一戰をするの勝には之を本據として浦港及ニコライスクを衝くの足掛りとなし又平時にあつては加奈太の鐵道に對し商賣上の停車場として支那北部の商賣上中心點となすに適すと併しながら巨文島はチャールズデンクが希望せしほどの地にてはあらざりしなり且つチャールズデンクの政略は日本なる者を度外に置き日本が露清の側にあることを忘れて政略を立てたるものにして是れ大なる謬見なりし也故に日本を度外視しては英國の政略が到底成立たざるより遂に巨文島を捨つるに至りしなり。

然る唯一の場處にして商賣上の中心點と兵略上の中心點とを合すべき所例へば香港の如き場處と今一は商賣上の點のみより必要の土地と兵略上の點のみより必要の場處とあるものにして世人の知れるが如く地中海のマルタ島は商賣上には不用の地ゆれども之を兵略上より見るときは地中海の喉首たり又マゼラン島の如きも商賣上には用ふるに足らざれども地中海の喉首を扼するは實に此處にあり故に兵

略上に於て英國は此處をも扼せり是れと同じく東洋の大勢上必要の地にも亦た必要にして商賣と兵略との二點を兼ねずして可なるか或は兼ねざるべからざるかと云ふの問題は頗る考慮を要する可らざるものたり然れども兵略上の必要の處を出來得る丈商賣上の中心點に近接の位置に取り以て東洋の大勢を抑制せざるべからざるは明かなり因て東洋の大勢を將來に推考するときは香港は南方に偏するを知らざれば故に此處に坐して英國が東洋の大勢を將來永遠に控制せんとは到底望む可からざるの事たり未れば何れの處か東洋の要スべき地たるべき地を獲ざれば東洋の大勢は得て制す可からず其の地は果して何處なるや今左に之を論ぜん。

惟其地は何處なるか余の考に依れば支那の台灣にあらざれば我邦の大島ならざるべからざるなり因て此に台灣と台灣とを比較して孰れか果して優れるかを詳究吟味せんと欲す。

先づ台灣より吟味せんに北緯三十一度五分より三十五度二分に涉り地理學上より長さは北を東南を圍に長くして即ち長三百四十四英里横六十五乃至七十英里面積一萬

四千九百七十八方英里なり而して其の位置たる北支那海と南支那海の間にあり更に又其北支那海を見れば日本海と黄海との二つに分れ轉じて東南を見れば東は太平洋南は南支那海と濠太刺利亞に至るまでの西太平洋なり諸又氣候は如何といふに香港よりは温帯にして物産は其性質善美ならず花とも石炭あり米あり硫中砂糖は特産にして我邦へ輸入する砂糖の大分は此島の産なり

此台湾が果して東洋の大勢を控制するに足るの位置なるや否やを按ずるに先づ世界今日の有様は果して如何かより觀察を下たさざる可らず諸國の開け行く順序に於て最初には大が内地即ち陸地に於て貿易を營みしも次に河を利用する時期となり又其次に内海を利用する時期来る即ち歐羅巴の歴史上より云ふに最初は小亞細亞を其據處とし次に地中海を用ひ其れより地中海なる内海を用ひ其次は即ち此大洋を利用し行くの時期たるなり現に今日には航海術の進歩と共に盛んとして利用せり又此は鐵道なり其の有各なるロードスマンシップ三人出で蒸氣を發明して以來鐵道を赤陸上に於て非常に利用せらるるに至れ故に今日の形勢に於ては鐵道と航路とを利用することを得るや否やを察するは第一の要點なり因て

此點より台湾を觀察するに航路のみ利用するも鐵道のみ利用するも又航路と鐵道との兩ながら利用するも台湾は實に東洋の形勢を控制すべきの地たり何となれば彼の加奈太の鐵道に賴る所の歐羅巴若しくは亞米利加の貨物はツァンクーパーまで來り是れより東洋に送られ香港に廻すには必ずサンドウイッチ島に出るが若しくは直航して横濱を經亞細亞大陸と臺灣との間を通過せざるべからず此の里數を調るに凡そツァンクーパーよりサンドウイッチ島まで二千三百六十英里これより我邦の横濱までは三千四百四十英里而して我横濱より香港までは千六百英里又上海までは凡そ一千英里なりとす是加奈太鐵道によるものなり次に亞米利加合衆國の東部より西方に貨物を送り桑港より亞細亞大陸に之を輸入するにも亦是非とも太平洋を通過せざるべからず即ち桑港よりサンドウイッチ島まで二千百英里サンドウイッチ島より香港まで四千八百九十三英里にして又一つは堀割即ち運河成就して巴奈馬の地峽若しくはニカラグアの海峽を横きりて來るに至れば此ニカラグアより我横濱までは四千二百五十英里あるなり此處より太平洋を指せば同じくサンドウイッチ島に至りそれより亞細亞大陸に來らざるべからず何となれば汽船には石炭を燒かざるべからず

らざるに船は數十日分の石炭を積むと能はず加之飲水も亦多く且つ永く蓄置ぐ
 こと能はず此三點よりして時々陸或は島に寄泊すべきの必要あり又南亞米利加の
 カルラより東洋に来るには此處よりサンパウロまで五千二百四十英里其より東
 洋の我邦若くは香港上海までは前述の如し故に亞米利加洲を鐵道にて横ざり其れ
 より船を用ひ或は最初より船にて新運河を通過するとするも其航路はサンパウロ
 子を経て我鹿兒島の南を通り而して上海に達するか或は台灣と大陸との間を過ぎ
 て香港に至るかこの二つの内必ず其一に依らざるべからざる者とす又將來濠太刺利
 亞との關係を按ずるに濠太刺利亞より香港に至るの航路に四あり第一はカローラ
 島の東側を経てニューサウスウェルズを過ぎニューゼーランドを通過する一線なり
 其里數は六千英里次にカローラの西側を通るものにして一線は五千五英里一線は
 五千英里あり又他の一線はポルトガルの西側を通つて新嘉坡を経香港に航するもの
 なり故に之が今一步進むときは濠洲より香港に至る現今の航路は台灣の南を過ぎ
 て香港に着するに至るべくして其れより北に上るものは必ず台灣と大陸間の海峡
 を通過せざる可らざるに至るは必然の勢なり

尙は又鐵道に就て見るに彼の緬甸の鐵道を伸ばして揚子江の河口に突出し平時に
 あつては商賣の用に供し戰時にあつては出兵の便を策するとしても上海より一步
 海に入りて南に行くには此台灣の側を通らざる可らず北に行くには我邦の大島近
 海を過らざるべからず尙ほ此談を進めて西伯利亞の鐵道成るの日に及ばんに浦
 鹽より日本海に出で支那海印度洋に航路を開くに至らば大島近傍若くは台灣の側
 は如何にしても通らざるべからざるの順序となり居れり故に此鐵道なり或は航路
 なりを今後大に東洋に於て利用せんとする以上は其線路の集まる點を見出し之を
 堅扼するといふことは實に必要の問題となるなり其必要たる所以は尙ほ我大島と
 彼台灣とを比較しつゝ詳述する所あるべし

此の如く數多の航路が將來東洋に開らば蜘蛛の巢の如くなり行き其結合する處は
 台灣若くは大島たるべきなり於是此航路の止まる所の國の將來は如何になるべき
 かは即ち非常の問題たるべきなり例へば茲に何程航路を開らくも其止まる所の國
 が漸々衰弱に歸すときは其航路は到底無用なり斯かる有様にては勿論此東洋の大
 勢を控制するなど思ひも寄らぬ事にして之に反し航路の止まる所の地が將來非常

に有望の國なれば其航路は益々要用を感じて結局航路の結合したる處は益々必要なる處となるべし故に専ら此問題を一々に探討尋究せざれば東洋に於ける大勢上の判断は爲し能はざるなり

これより進んで第一に調査すべきものは航路の集點たる加奈太と合衆國の二に於て第二にはニカラガ運河の結果と南洋諸洲の將來是れなり是等の諸項が明瞭にならざる以上は到底支那の將來は如何西伯利亞及び日本の將來は如何と云ふ問題も決定するに能はざるなり因て是れより以上諸國の位置は今日果して如何并に將來果して如何又是等の諸國が如何に將來東洋の大勢上に働くやの問題講究の必要を生ず之を説くには一々統計を引いて實着に議論を下し證據を擧げざるべからず先づ加奈太より論斷を下さんに加奈太は英國の領地にして英國の植民地たるが故に今日迄の加奈太に就て見れば其東側だけは人口多く商賣も亦盛んなり即ちクニベックセントパウル或はハレハックスは是れまで盛なる所なりしなり然るに近來の統計に依るに其盛況は東岸より漸々西岸に移つて往きつゝあり今統計を擧げて其の證據をなさん即ち千八百八十一年より千八百九十一年までの間に東部諸州

の人口は僅かに一万〇二百九人の増加を見るのみなりしに中央部にては三十一万五千六百三十六人の増加を來し西部に於ては其間に十七万八千七百六十六人の増加をなせり即ち加奈太統計は十年間に五十五万四千五百九十六人の増加となるなり再び更に西海岸即ち太平洋に面せる地方の統計を見るに千八百七十一年には十萬六千八百十四人なりしが千八百八十一年即ち十年の後は十六萬八千九百六十五人となれり而して千八百九十一年即ち又十年の後は三十四萬六千九百三十一人に増加せり因て加奈太一國の形勢を通觀すれば常に東海岸より西海岸に向て商業の繁榮が移りつゝあるは明かなり且つ加奈太は製造の原品となるものを大に産出し加之鑛山に富りり而して其の總面積は殆んど中央歐羅巴諸國を合しても尙ほ及ばざるの廣袤を有せり即ち三百四十七萬〇三百九十二英方里にして其人口と土地との比例は一英方里に付き僅に一人に過ぎざりしが千八百八十一年には每一方里に一人四分の一の割合に進めり扱又太平洋の海岸には石炭乏しと雖も幸に加奈太は之れに富み亞米利加洲の太平洋海岸に在つて石炭を産する所は加奈太のグアンタナバロの近傍のみなりと云ふも可なり且加奈太の形勢一變したるは千八百

八十六年にして彼の千八百八十六年に加奈太の大陸を横ぎる所の鐵道が始めて全
通せしに由る此鐵道の長さは四千九百七十三英里ありて此の如き長線鐵道を僅々
四年六ヶ月に落成せしは驚くべき手際なり之を歲月に割り付くれば凡そ一日に二
英里六の鐵道工事を成就したるものなり抑此鐵道は紐育より桑港に直れる彼の合
衆國鐵道と競争を企て之を敷設せしものなるが其競争も爲すに足るものなり即ち
ウヰンターバトよりモントワールまでの里數は二千九百六里あるに桑港より紐育ま
では三千二百七十一里なり故に里數の點に於ては既に勝てり云ふべく此加奈太
鐵道にて最も早く流車の通達せし時は四日と廿三時間なりし而して此鐵道が加奈
太の太平洋に向する地方を繁昌ならしむる大原因は如何と願れば此鐵道の西端は
英國が太平洋に對する所の商賣の出口即ち前門にして此前門は支那及び日本南洋
諸島ニユーロパ及シテ南洋洲に對して開きしものたり既に此に門戸を開きし以
上は是れより英國及び加奈太の政府は如何にもても門前の往來に出來るだけ道路
を造らざるべからず夫の加奈太政府が支那及び日本に向ひ航行する定期の航路に
毎年六万磅の保護金同じく澳洲の航路に十五万磅の保護金を支出するに至りしも

畢竟之が爲めなるのみ
茲に講究すべきは亞米利加にして亞米利加合衆國の起源は歐羅巴人が開始せし以
來百年前迄其東海岸の紐育ボストン或はフィラデルフヤのみが亞米利加の最も繁昌
なる處なりしも此繁昌は次第に西部に移りて遂に今日は中央の一府なるチカゴが
紐育よりサルラゴと肩を比ぶる大都市となれり抑合衆國より太平洋に出るの門戸
は桑港にして其桑港よりの航路は何處に向ふかを案ずるに我邦の大島と陸地の間
に或は臺灣と大陸との間を通らざれば香港に到ること能はず又上海に向ふには必
ず我大島の側を通らざる可らず而して今更此合衆國の進歩の有様を見るに千八百
八十年より同く八十四年に至るまで平均の商業進歩は一ヶ年の外國貿易輸入一億
三千七百万磅輸出一億五千八百万磅にして即ち輸入に於て百分の二十二輸出に於
て百分の三十六の進歩をなせり其人口の如きも千八百八十年には五千〇五万人
なりしが同く八十四年には五千五百五十万人に増殖し即ち人口は百分の四十の割
合にて増加せり而して此國の政府も亦太平洋の航路を保護する政略を取れり殊に
彼の二三年前マクドナルドが亞米利加の海關稅則を立て、保護稅の最上點まで上げ

したる其結果は歐羅巴諸國を商賣の敵に取りしが故に政治上工業上及び商業上の
 みならず航海權までも争はざるべからざるの境遇となり大西洋に航する船にせよ
 太平洋を通ふ船にせよ船の速力と噸數に應じて保護金を出す政略を執るに至り隨
 て此航路は將來大に有望のものとなれり
 且つ今ま二の東洋に來るべき航路は彼のニカラグア運河の成就せし曉に來るべき
 航路是れなり之を成就せし後は大西洋の貨物は皆な運河を経て東洋に出づべく
 初東洋に出て亞細亞大陸に送り來るには前に述べし如く必ず我大島と台灣の間を
 通らざるを得ざるなり其他南亞米利加も亦將來望みを屬すべく尙ほ我邦人が最も
 注意を要するものは南洋洲なりと是に於て濠太刺利亞の航路を充分に討究せざ
 るを得ず此濠太刺利亞も亦英國の植民地にして抑英國が世界中に領地を有せる
 所の廣袤を計るに八百零四萬英里にして此濠太刺利亞の植民地は實に其五分の二
 を占む即ち面積二百九十四万六千五百五十三英方里を有せり因て之を各國の廣袤に
 比較するに英吉利の本國には二十六倍佛蘭西には十五倍歐羅巴露西亞の半ばに當
 り殊に亞米利加合衆國とは面積容ば匹敵すべし更に其の人口を數ふるに千八百八

十九年にはその人口三百一十五万五千六十八にして濠洲七植民地の富を數ふれば凡
 そ十一億四千八百万磅ありて一人に付き三百八磅餘の富を有せり其他鐵道電信及
 び未だ賣買せぬ土地十二億九千六百萬磅を算すべし再び此濠太刺利亞洲の富を歐
 米各國に比較すれば合衆國の富は濠洲に九倍し英國及び佛蘭西の富は各凡そ八倍
 し獨逸は六倍露西亞は四倍墺地利は三倍伊太利は二倍西班牙は一割半加奈太白耳
 義和蘭は濠洲の次に位するものなり單に上述のみでは英國と外國との關係分明な
 らざるが千八百八十九年の濠太刺利亞の外國貿易高は一億三千百七十四万九千磅
 にして其中百分の七十七は英國との商賣より成り又千八百七十九年より同く八十
 九年までの外國貿易の進歩を調べ之が比較をなせば凡そ二千四百万磅の進歩を見
 るなり亦は即ち航海にして濠洲の航海は今日果して如何進歩をなすかを見るに毎
 年凡そ千六百十六万三千八百二十噸の船舶入り來り其の船も亦重に英國より來る
 ものなり而して英國と濠洲との距離は凡そ一万二千英里なりとす又た濠洲の鐵道
 は一萬千英里の延長にして電信に至ては四万英里の長さに亘れり且航海のとは近
 年に至て香港より濠洲への定期航路も開かれんとせり斯の如き有望の土地にして

其航路は臺灣の南に通ずべき四線とも此地方より来るものなり而して此濠洲が五十年前と比較して今日非常の進歩をなせり今後復た百年も過ぎたらば第二の合衆國ともなるべきは明瞭のとなりとす抑此濠洲の富が進歩するに隨て亞細亞との關係は密になるべく其密になるに従て香港の南又は北に出づるには臺灣の南北に出でざるべからず故に濠洲が進むに従て此航路を他國より占めらるゝときは我國に於て非常の影響を蒙るに至るべし今更英國と獨逸とが此南洋の航路を争ひつゝあるがこれは後段に於て詳述する所あるべし

次に亞細亞の一面より之を觀察し來れば彼の西伯利亞は將來如何になり行くべきかの問題にして全體西伯利亞は廣大なる土地にて面積は千二百萬キロメートルありて雖も人口僅に四百方に過ぎずさて此西伯利亞は如何に觀察を下すべきか先づ今日之を見るには將來西伯利亞がどうなれば東洋にどれだけの關係を及ぼすか云ふことは必要問題にてあるなり西伯利亞の人口は今日は四百方位に過ぎざれども是れは尚進歩するときは大なる植民地ともなり又又大なる國ともなる可き處たり然るに斯かる望みある好田面が今日まで開けざるは如何なる原因なるか是れ他

なし外部との交通未だ全く開けざればなり一昨年七月英國の海軍大佐エンソン云ふ云ふ入り西伯利亞の外よりの交通を付けんには英國より船を乗出し北氷洋に廻りてオムニセオの河口に出で此河にある所の漁船に乗て河源に溯りオムニセオに達するの道を探出せざる可らず此府は即ち西伯利亞の中心なるが故に此處に至り貨物を賣らして歸る時は此航路が開けて夏季には歐羅巴と西伯利亞の交通開らく可し然る時は非常なる影響を西伯利亞に及ぼすべく此交通にして進まんに爲るべし河の地方縦千五百三十英里横千二百六十英里の間は盛なる商業の區新たに開かるべしと云へり是れは其當時歐羅巴に於て大に人の注意を引きし所にして該地方の南側が豊饒の土地たることは余が贅言を須たざるも既に世人の知る所なるが尙ほ之に關して歐羅巴人の説く所を開けは土地としては世界に於て是れほど豊饒の土地あるなし唯だ一般人民が雪と霜を以て閉ざれりと思ふのみなりと兎に角一度此地と外との關係を付くことに注目し將來果して之を開くに至らば西伯利亞は非常の進歩を爲すべきなり

彼の西伯利亞の鐵道が元來露國の軍略上より敷設せらるゝは勿論なりと雖も單に

之を軍略上のみの點より見るは大なる間違なりと謂ふべきあり何となれば凡そ鐵道を敷設するには其の經濟の目的を立ざるべからず併し軍用鐵道にても獨逸の如き平時不必要の時には用ゐざる鐵道あれども西伯利亞の鐵道は是れと同一視すべからざるものなり余の見る所を以てすれば西伯利亞鐵道は半ば軍略に出で半ば商賣上の目的を以て架けられたるものなり然らざれば西伯利亞の鐵道は到底目的を達すること能はざるべし今ま之を確めんが爲めに統計に由りて西伯利亞内地の事を述ぶるに當て先づ茲に述べる可らざるものあり他なし西伯利亞の土地が若し沙漠の如き荒寥の地にして將來少の見込なきものとすれば單に軍略一偏の鐵道と云ふも可なれども西伯利亞の内地は土地饒沃にして鑛山あり産物ありと雖も唯だ外邦との交通なきが爲に今日迄は開けざるものにして此の鐵道に就ては將來大に商賣上の見込あるの所たり茲に濠太刺利亞の進歩したる事蹟を當欲めて見れば濠太刺利亞が始めてより今日まで漸く五十年前後なるに其間に航海に於て見れば濠太刺利亞の勢力は歐羅巴を動かすに至れるにあらずや故に西伯利亞の如きも土地の豊饒なることを充分證據立

つることを得しならば濠太刺利亞の如く之を開くに難からず且つ濠太刺利亞を開くに五十年を以てしたならば此地方は其半分の時日に於て開くことを得べし何となれば五十年前の世界と今日の世界とを比較するに五十年前は倫敦と雖も今日の如く夥多の資本あるなく航海亦た今日の如く開けしにあらずればなり凡そ國を開くには航海と資本とは非常に其の助けをなすものあるが故に濠太刺利亞が五十年を経て開けしとすれば西伯利亞は其半の日子即ち二十五年後には凡そ濠太刺利亞の今日に於けると同じく開かるべきなり斯くて此地方の鑛山及び産業を開らんとその見込立ちし以上は此鐵道は大に商業上に見込あるものと余は考ふるなり斯くて鐵道が二十年若しくは三十年の後に於て商業上に非常の利益を與ふるものとすれば決して之を單に軍略上の一點のみに歸すべからざるや味をたるものなり凡て此の如き大工事をなすには勿論五年や六年後のみの淺近の事に因りて敷設さるべきものにあらず或は二十年或は三十年の後に其地方が如何になる可きか此鐵道を利用せば後來西伯利亞が如何の位置にまで開くるやを考へ且つ其開けし後の形勢を考へて而して後ちに其鐵道の商賣上の目的なるや或は單に軍略上の目的のみなるや

否やを判断せざるべからず彼の僅に今日の人口少なく土地未開の西伯利亞に由りて直ちに此鐵道は軍略上の用のみなりと判断を下すが如きは大早計たるを免れず然らば此西伯利亞の内地の將來は如何ほどの事業が成さるべきかは單に今日の現狀のみを以て計るべからざるなり

因て先づ支那と露西亞との貿易地たるキヤクタイ即ち賣買城の狀況を見るに千八百八十五年には輸出は凡そ四百五十七萬ルビアルありて輸入は千五百廿九萬ルビアルにして其中茶のみにても千二百九十萬ルビアルに上れり此キヤクタイは支那茶が盛に露西亞に輸入する所にして露人は此茶を非常に嗜んで殆ど他の食物同様になすものなるが故にキヤクタイの茶のみにしても斯の如く多額には上ざるなり

今日すら斯の如くなれば此上鐵道成就の日は一層盛んなる結果を見るに至るや知るべきなり此茶は多くは支那の漢口より出づるものにして漢口より出づる所の茶半は船にてオアシヤに輸送され居れば鐵道成るの日は此大分は積載せられて諸方に輸送するは必然の勢なる事は世人の許す所なり

殊に彼のニコニコロットの一年の商賣のみにても一千萬ルビアルありて浦潮

新徳にても百六十七萬ルビアルの輸入千八百七十九年の統計と五百三十四萬ルビアルの輸出千八百八十五年の統計ありニコライスクには四百五十萬ルビアルの商賣あればストレンジノスクには百三十三萬ルビアルの取引あり又此西伯利亞地方にて千八百三十四年より全八十九年に至る五十五年間に掘出せし黄金のみにても五万七千五百三十二ポンド此價一億二千萬磅の巨額に上れり其他銀なり石炭なり年々掘出せしものを調査せば其高も亦莫大なる金額なるべし

次の問題は殊に我邦に近接せる黒龍江の沿岸州のことにして此沿岸州全跡の面積は凡そ百五十萬平方露里にして其人口は十二萬五千人なり而して沿岸州の東南即ち浦潮近傍の人口は八萬五千人許にして其中露西亞人は五萬七千人なり其土地は極めて豊饒にして一例を擧ぐれば小麥の收穫等は比類なきものなり斯かる有様に西伯利亞の諸部は商賣も人口も日に月に進めり今此の上に鐵道貫通せば西伯利亞の繁昌に赴く可きことは疑ふべからざるものなり

又次に講究せざる可らざる問題は西伯利亞鐵道の速力にして是に就きては前に余が西伯利亞鐵道論を著し此の鐵道成功の日は九日若くは十二三日を以て西伯利

亞を通過することを得可しと述べたり然るに其の後已に駁撃を試みたる人あり併し是事たる種々の點より觀察を下さざる可らざる事にして余の著書に悉く論述し置けり先づ西伯利亞鐵道里數の概要を調査するに露西亞の國議院にて議決せし里數は七千二百九十二露里にして又大同參謀部大佐ウオーロン氏の見積に依れば七千四百九十露里なり然れば其の間凡七千三百里と見て可ならん今之れを歐羅巴の急行列車の速力にて算するときは其日數大に減少するなる可し即ち英國の鐵道は一時間六十英里佛蘭西は百二十キロメートルの速力を有すれば到底是を以て計算すると能はず先づ歐羅巴にても英佛獨逸四ヶ國の急行速力の平均を見るに恰も一時間四十英里位の割合なり此の速力を以て算するときは停車場に止まる時間を算入するも七千二百九十二露里の處を先づ五日と十二時間にして行くことを得可し故に一萬露里の里數は七日乃至八日にて充分通過し得らるゝと明なり今ま一例を擧げて比較せん夫の加奈太鐵道は四千五百露里ありて最急行列車にては三日十九時間普通急行列車にては四日廿三時間にて達す可し此速力を以て見るも一萬露里の里程は加奈太鐵道の一倍に少し過ぎたるのみなれば七八日乃至九

日を以て充分に通行し得べき理あり尤も露西亞鐵道速力の遅緩なるとは余も又之を知れり併し是れには大に理の存するありて其遅緩なる所以は石炭を焚かざして薪を焚き或は炭屑を焚くが故なり然るに此西伯利亞鐵道に限りては木炭を焚かざして石炭を焚き之を運轉すると殆ど條件附の如くなり此大鐵道の通過する道筋には石炭の供給が出来るだけの鑛山ありて今日も既に掘出し居あり又將來充分の石炭は東部にも西部にも又中央部にも發見せり然る以上は必ず從來の露西亞鐵道の速力より一層迅速なる即ち歐羅巴各國の平均速力一時間四十英里の割合を以て走るとを得るの見込を付け得可し然るに或曰く勿論短里數なれば其割合を以て行き得可しと雖も長里數に至ては到底能はずと併し是れは他に例證ありて今日線路の最長處は紐育より桑港に出る鐵道并に加奈太を横斷してセントリールよりウヅンクムに到るの鐵道なり然るに前にもいひし如くウヅンクムよりセントリールまでの里數は露西亞の里數にして四千五百里あり此の里程を通過するに最も速かなりしは三日と十九時間なりき此所には鐵道の荷物の揚卸し又は停車場での停車時間を含めり又平日なれば四日と二十三時間を要す願て先きの七千三百露里は西伯利

亞鐵道だけの距離なれば之に蒲潮斯德より聖彼得堡までの里數凡そ二千六百露里を加へ凡そ一萬里と見て先づ間違なかる可し之を加奈太鐵道の最遅緩なる速力にて試ろみんに石炭を積み水を入れ人を載せ貨物を積みし經驗上の速力に由るも七日……八日……九日と見れば充分の時日なり去れば此鐵道成功の上は七八日乃至九日ぐらゐにて通行するを得るに至ると云の考は決して無理の言に非る可し又現在此例證の有る以上は空想の言ならざるや明けし扱此瀛車速力の遲速に由ては我日本に於て又用意の方法あるを以て此問題は諸君と共に深く研究を要する事と思ふなり右の如く此瀛車が斯く短時間にて達するを得るに至れば加奈太鐵道と競争し得るや否やといふ問題になり歐羅巴と東洋との關係が此問題の如何にありて成立を異にするが故にこれは今日餘程日本人の考を要するの點あり以上述べ來りし次第なれば此大鐵道に就いては速力の點より云へば大石君と意見を異にし又之を只軍略上の一點より異するものといふの說に至つても意見を異にするなり併しなから大石君は之に許すに將來には西伯利亞鐵道も宜しからんといふことを以てせられたり是の將來てふ一言を以て見れば西伯利亞が開けし以上は此西伯利亞鐵道は

商賣上にも利用せらるると云ふ見込と思はるゝなり扱は其將來てふこと亦一つの問題となるべし先づ余の考によれば今より二十年三十年の後には商賣上に利用せらるゝに至ると思はる扱露西亞は是れだけの時日を目的にして此鐵道に商賣上の目的をも含有せし居ることは充分許し得べき事なり扱又西伯利亞鐵道に付ては昨日歐羅巴の電信を見るに或は中止せしと併し是は諸君の知らるゝ如く昨年此鐵道を布設するに付て歐羅巴洲に於て公債を募りたり而して露西亞は專制國なるを以て一度發企せし事は一步も譲らざるの國なり且つ又此の大鐵道は六年の後に成就するといふ冀望と見込は露政府の夙に定めたるどころにして露の外務卿にわれ大藏卿にわれ疾く之に決心し居る以上は歐羅巴よりの電信といへども決して信用を措くに足らず殊に此大鐵道に關しては從來種々の虛説を爲し商賣上の關係等より種々なる電信を打つ輩もあれば餘程是れは注意を要するの點あり且つ余は露西亞は必ず鐵道布設を實行す可しと若し出來さるときは日本人自ら西伯利亞に行き出來るだけの盡力をして速かに成功するやうにせば宜からんと云ふの考を懐けり斯くして出來るだけ短時日にして之を落成せしめ從來東洋の形勢に就いて或は疑ひ

或は恐れ霧中に居るよりも寧ろ嚴然此形勢を一定することは日本の爲めに計の得たるものなり

次に西伯利亞鐵道成就して蒲潮斯德を門とし東洋の上海或は香港に到る航路は如何といふに即ち日本海より出づるか如何にしても朝鮮と對馬の間が對馬と九州の間かを通して支那大陸と臺灣間若くは我大島の近傍を通過せざれば南洋に向ふこと能はず又亞細亞大陸の南方に出づること能はず即ち此西伯利亞の交通盛なるに従つて此航路の必要を感ずるに至るなり

次に其航路の收まり或は東洋の主眼たる所の支那なり夫の航路盛なるに従て亞細亞大陸は益々世界の目的物となるべし全陸支那てふ國は我邦と隣を下し人口四億萬を有し土地亦洪大にして他年一日此國が大に太平洋に於て商賣上其他に勢力を見はすべきこと疑ひなし故に今ま一つの問題は此東洋商賣の中心點は先づ新嘉坡より香港に移り香港より再び北に移つて上海に及びしものなりさて上海の位置は將來も猶ほ今日のごとくに商權を把握し得らるべきか或は又上海の商權幾分かを外の處に引つけ行くか是も一つの問題にして且つ又上海に向ひ日本人は手を付く

るや否や或は支那内地の商賣の中心點に手を付くるや否やは今一層大なる問題となり

昨年余が大阪及び京都に至りし節商工業上の對外策を述べしとありしが何れの問題より見るも日本の商賣の花主先きは支那なり然るに上海に日本人が手を付けると云ふ點に至つては少しく思考を費すべき者あり於是か先づ支那内地の商賣の中心點は將來何處に歸するか云ふ問題を研究して見れば余の考には如何にしても漢口に在りと思ふなりとは何故か云ふに曩にも述べし如く此世界で鐵道を利用するとは大に都府の位置等に関係するに至れり例へば今日白耳義が旺盛に赴きしは鐵道敷設の後なりき又一時繁昌を極め其後一度衰へたる地中海のゼノア港が近來復た以て熾盛になりしは鐵道成就し以太利及び瑞西の貨物をゼノアに出すことを得るに至りしによる又今日シヤツゴは如何であるか北米内地の中央に大なる都府を作るに至りしは全く鐵道の然らしむる所なり扱支那には未だ鐵道布設せられずと雖も將來此處に鐵道が掛りし以上は大に其形勢を一變し來る可きは今日より豫め考へ置かざる可らず今ま夫の漢口と云ふ地は如何なる處であるかを見るに楊子江を

湖より西の河岸にあり支那の鐵道の計畫を見れば實に漢口を中心として此處より鐵道を起し支那にかけて内地を横斷し天津に出で北京に達するの積りなりさて又南は漢口を元にして大凡の目的は漢口の南に出で廣東に延びずの計畫をなせり又今又一の大きな原因は英國が緬甸のラングンより起せし鐵道にして此鐵道が支那西部に通すれば新に支那の重慶府に結付く可し然る時には英國は揚子江を利用し平陸にあつては英清の商賣を勉め戰時にあつては英清の同盟を立て是より兵を送らんと考なるが如し現にマンチエスターの商業會議所にては昨年十月頃なかりし英國の殖民大臣に向ひ支那政府に鐵道布設の事を要請すべしとの聯合を爲せし條約も今一の歴史に遡つて見れば彼の芝罘條約にて揚子江を英國が航通するを請求したりし時支那は斷然之を謝絶したり然らば緬甸の鐵道を延長し支那に進入することを得ずと云ふを英國より支那に談判せしに支那は鐵道を今布設せざるは甚だ不利なるを見ず重慶府まで英國船の航通を許し但支那の蒸氣船を此處へ浮べし以上にあらざれば英國亦船を浮ふるとを得ずと云ふ條件を置きたる許したるものなり即ち英國は是にて既に一歩を占むるとを得故に次に緬甸

の鐵道を起し引出すといふことは將來必ず實行するなるべし去れば此處が開けし以上は支那の富源を開くことを得ん彼のウエプスターが世界の商業の有様を書いで今日の支那は人間と物産の藏なり唯だ未だ外側の戸開けざるのみと云ひしがとく一朝此戸開くる以上は歐羅巴各國の競争場となるべきことば歐米人の曾許す所なり

夫れ支那鐵道の南北の起點は如何と云ふに即ち漢口なり次に上海より進み揚子江に由りて之に溯行する漁船の集る處は如何亦漢口なり加之將來緬甸より鐵道にて揚子江に出づべき路も漢口其中心となるべし而して現に日本の物品は上海に到り皆此處にて荷揚するかのいふに左にあらざ更に船にて漢口に運び此處に於て支那の内地を分配するは今日の形勢なり抑て鐵道成功する以上は漢口は少くも支那内地の商賣上の中心點となることは疑を容れず斯くなれば上海の位置は半ば存するか或は全く其盛を漢口に奪はるゝかの問題となるべし

抑て英國が此處に鐵道を布設せんとするには勿論時と金とを經濟することには注意すべしされども現に商賣品の如きは船にて運送する方利益あるが如し例へば例

パイプラインよりマツチエスタには充分なる鐵道布設せらるると雖も此鐵道有るに
 も拘はらず今日ではリバーパイプラインとマツチエスタとの間に運河を掘つて商賣品
 杯は昔船にて運搬するに依りても知らるゝなり然れば如何に漢口に鐵道布設せら
 れ上海まで延長に来るも貨物は矢張り船にて漢口に運搬せらるゝなるべし勢ひ此
 に至りなば東洋の商賣上上海果して中心點となる可きや漢江果して中心點となる
 可きや固より決すること能ざるなり
 本の問題は支那に對し日本は漢口より先きに手を付く可きか上海より先きに手を
 付く可きかの問題なり余は先づ漢口は其第一着たるべきを信するなり其れは何故
 かと云ふに今日の上海は實に盛にして英佛其他の諸國人より成立する居留地の如
 きも中々盛なり併し英佛等が上海で商賣權を掌握するは濡れ手の攫み取りかと云
 ふに決して然らず英佛は支那と前後兩度戰爭して人を殺し血を流し招魂處を立て
 たる後に始めて商權を取りしに非ずや今日まで上海に西洋人が投したる資本は擲
 か多ざるが其中徒らに捨てたるものも亦實に夥し結局今日の上海は捨てし資本の
 上に其基礎を立て而して始めて始めて商權を握り居るなり之に反し我日本人は金も出さ

更甚し流さず勿論招魂處をも立てずして此英佛の上に出んとするは餘程困難なる
 事業にして余の考にまれば漢口は幸に未だ英佛獨等の歐羅巴人の居住甚だ少きの
 所ならず將來如何なるかと云ふことを考へ居る者も又少なじ此處に日本人が先
 鞭を付けて日本が支那に對する商賣上の基礎となし英佛其他の歐羅巴人に先んづ
 る事は今日上海に至つて英佛人の臂を嘗めるよりに勝ると方々なり
 抑先づ各國の現状と將來とを觀察せしに由り再び航路の止まる處及び起つて來
 る處を調査せんとす即ち日本にて將來最も望を屬する處あり此地方進歩すれば進
 歩するに從つて此航路は繁劇となり益航路の必要起るべし必要起るに從つて此航
 路を廣めざるべからざるとの問題になり是に至つて始めて眞の東洋の大勢上の問
 題となるべきあり
 今先づ臺灣より觀察するに此の臺灣は東洋の形勢上よりして英國を東洋に於て
 制するには最好の位置といふべし如何となれば前きに述べし如し英國は香港を取
 つて之を商賣上及び兵器上の兩權を振ふの根據となし居れども抑此香港は臺灣に
 て制することを得るなり何となれば香港は第一南に偏し而して加奈木の鐵道も掛

九十一
らず桑港の鐵道も掛らざニカラグアの運河も出來ぬ以前には如何にも東洋の喉首
を控扼せしに相違なしと雖も今日は既に加奈太の鐵道も出來桑港の鐵道も出來
カオグアの運河も亦日に功に就くの時勢となり隨て東洋の航路は多くは香港の南
に出でずして臺灣の北に出づ故に何ほど香港にて之を押へ付けんとするも到底能
ざるなり之に反して臺灣は實に其衝に當れるのみならず西伯利亞鐵道より出る者
も及蘭甸より出で來る者も等しく此處にて扼するを得べし即ち簡短に之をい
は南より來るものは香港にて押へ得べきも北より來るものは是非臺灣にて之を
押へざる可からず再言すれば香港以北は台灣にて押ふれば英國は一步も北上する
能ざるを事何ぞなれば香港より北上海に到るには是非大陸と台灣の間を通過せざ
る可らず且前記にも言ひ如く亞細亞の商賣は益々新嘉坡乃至香港フアンを去りて
上海に來り又行々は漢口に集ると云ふ有様となれり加之加奈太及び桑港の鐵道全
通じカオグアの運河の開けんとする以上は香港は到底將來に覇權を行ふの地に
非ず凡そ斯くの如く航路を取つて我地位を失ふといふこととは凡に佛蘭西が英國の
東洋覇權に對して實存せしことなるなり夫の路易十四世は嘗て一度安南に援兵を出

九十二
し加奈太が其の國體は如何と云ふにカオグアと廣東間の英國の航路を經る英國
の東洋に存する勢力を擁護せんが爲めに行つたるなり又佛蘭西が南洋の島を衝くと
云ふことを全く此間を經たんと云ふの考へに外ならず尙ほ千八百八十二年に佛蘭
西が東洋を叩いて支那海と印度洋との間を斷ち切らんとせし政界を震に先見ある
政界にして之に就き或人は評して曰く英國の東洋に於ける勢力を半分以上奪ふこ
とを得たは其の故に一朝事あるの時に此航路を切ると云ふことは最も重要な問題と
なれば其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に
併し東洋に於て一朝事を爲すの時に當り英國は以上の外尙ほ一勢力を添えるの道
程存せし其第一は薩摩に述べし如く加奈太の鐵道なり此鐵道成就せしより英國は
東洋の兵艦駐すに當りては路を他國に假らざり自分の土地のみを通して送ることを
得るに至れば其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に其の故に
併し加奈太の鐵道は由るの考なり而して其兵は如何にと云ふに現にハリバックス其
他加奈太は常に英國兵二千五百人ほど屯在し電信を發すれば是兵は四日或は五
日間にてハリバックスに出ることを得べし去れば一朝印度に事あるの時はハリバ

イペルを發して香港に出で新嘉坡に寄せ兩處の兵を載せ大陸の中央に來るに三十
八九日を要す恰度此日數は蘇士運河を経て來ると同じくして或は少し速い位なり
故に戰時に在ては此兵零を取らんといふとは近時英國の考ふる所なり然るに加奈
木より此軍兵を出した所が臺灣或は大島にして英國の敵に堅扼されなば以上は一
歩も此を通過するに能ざるべし然るに英國は今ま一つの道を有せり則ち濠太刺利
亞にして現に先年埃及にて叛亂起りし際さへ濠太刺利亞より援兵を出すことを考
ふたり况んや太平洋に事あるの日に於てをや此濠洲より援兵を送るの考は千八百
八十七年に建てられたる英領の各植民地の共同策以來兵略上互に救ひ合ふ所の連
合を爲し太平洋に事ある時は濠洲より援兵を出すことに極り居れり此策は如何
にきいふに濠洲より香港の應援をなすに當ては左の航路を取らざるを得ず即ちカ
レドニ島の西或は東より台湾の南に出でざる可らず故に是れ亦臺灣を堅扼さる
れば此策は又番餅に歸するなり

英國に對する臺灣の位置は先づ斯の如し扱尙ほ此に一の面白い問題あり將來此東
洋に對し獨り國は備處とぞと數ふれば一は英國一は露西亞一は日本一は支那なり

又佛蘭西も東京に據て居る以上は是れも東洋の事に手を出すものと云ふことを考
へ置かざる可らず其他將來に爲すあらんとする者は獨逸なり其證據は東洋の各關
港場を觀し獨逸人が手を着けぬ處は更になし先年ヒスマルクは東洋に對する政界
上の意見として如何にして將來濠太刺利亞と亞細亞大陸との交通盛になるが故
に東洋の大勢を制するには此兩間を斷切するに若くはなしとの考案を立てたり此
兩間の航路を斷つのは取らざる直さず彼のナボロネー世が埃及を取れば即度と
英國の間を絶つて宇内の覇權を握るを得可しと云ふ政略の外ならず又夫の路易十
四世が安南に援兵を出してカルカッタと廣東間の航路を斷じ東洋の權勢を制せんと
せし故智に習ひしなり因て獨逸は千八百八十四年に始めてニユーギニアの東海岸
を占領せりこれにても英國の本國と植民地との間利害上大に影響を及ぼしたり然
るに是れは獨逸がホンの手始にて次にニユーギニアの北側なる英國の航路を切
んぞの考を以て千八百八十七年に至り夫の西班牙領なるカロリオン島を突然復た占
領したりしが其後此問題非常に繁雜となり結局西班牙と獨逸とが羅馬法王に其仲
裁を請ふに至れり然るに羅馬法王は性質豪横の人なりしが今も歐羅巴にてヒスマ

ルクは其威力を擅にし居れば一番之を敲き付くるときはローマンカトリック教を盛にすることを得ると云ふ考を以てカローンは全く西班牙の所有ありとの判決を下したり是に由て獨逸は終に之を取るに能ざりしが併し其意向と政略とは充分見るに足れり其他獨逸はフレイザン群島に力を展ばんとするに熱心せり又英國の航路を切らんとする政略に外ならず然るに今ま此台湾を押へ置くときはオスマルクの政略も亦壞すことを得可し如何となればオスマルクにて之を切らんとする政略を今ま一つ北なる台湾の南で切るときはオスマルクの政略も亦隨て壞る可きなり故に台湾は英國の政略即ち加奈太より來り濠太刺利亞より來たり或は香港より北上し來るものを皆押へ付け又他日東洋に於ける獨逸の運動をも押へ付くべきことを得る最好の位置といふ可きなり

因みにフレイザン群島に對する問題を調査するに我國にても此群島に就いては色々考へ居る人もあり又色々調査せし人もあるが余の考では此群島に向つて日本人が如何に働くとせしめて獨逸人なども約束を爲すは決して策の得たるもの非ず扱此處にて一事業を爲さんと欲せば今ま少し其基本を造らざる可らず其本を造る

ときは此處に移民を企つるにせよ何にせよ其れより以前若し他日此處にて紛議起るも充分日本の活動し得可きの策は立て置かざる可らずといふにあり則ち群島の本國たる西班牙に日本公使館を置くの一事是なり尤も今日にても西班牙に對する日本公使は佛蘭西駐劄公使の兼任にて全く公使なきには非れども眞に日本が群島に對して働くには馬德里の中央に日本の公使館を置き平素より西班牙の國情及外交の掛引等を充分に調査し事あるの時に當て外交上に一步も後れを取らざる用意あるは最も肝要の事とす今日、タイムス新聞を見るに日本がフレイザン群島中の一を占領し爲めに西班牙政府は日本に對して感情を害し居れりと若し公使館を設立し置んには斯かる間諜を傳へて兩國の感情を害ふ如き事は決して有らざるべし

英國并に獨逸に對する臺灣の位置は以上述べし如くなるが是れより支那に對する臺灣の位置は如何と云ふの問題なり扱此の臺灣は支那と外國と事ある時は何時でも支那に對して一の足掛りとなる處にして既に佛蘭西が先年支那と兵を交へたる時も先の臺灣及び附近の島を占領し支那を苦しめんとことを勉めたり故に將來支那

に對し事業を爲さんとする國は臺灣に着眼す可きは當然の事と云ふべし此の頃英國が臺灣を取るの計畫せりとか或は談判して一時之を借んとせりとか種々の問題歐羅巴の新聞に見ゆ而して英國其他が此に非常の注意を爲し居ることは疑ふべからざる事實にして既に一つの證據とす可きものは英國の政略は常に「パオロツク、オピニオン」即ち輿論を起さざれば外交上のことは容易に行れ難きが故英國の政治家は海外の地に就きて英國國民の注意を惹起す爲めには先づ國中にて最も世の注目する人物を選びて之を觀察せしむるなり故に先年「コンノート」公が印度より英國に還らるゝ時を機として臺灣を觀察せられたりし當時の新聞は盛に「コンノート」公の臺灣に寄られし事并に其島の有様を記して一般人民に之を知らしめたることあり凡て英國に於ては皇族の旅行する秋は殊に注意せざる可らざることなり即ち此「コンノート」公の臺灣行の如きは英國が臺灣に着眼せる一の證據にして若し此臺灣が他國に取らるゝ等の事あれば英國は進んで東洋に英國の働を爲す能ざるのみならず今日まで有し來たる東洋に於ける權力をも失ひ今日香港の盛昌をも半ば見棄せざるを得ざるに至るを以て此臺灣には大に着眼したるなり然れば其他の國が支那に

對する時にも一朝事ある時は佛蘭西の爲せし如く此臺灣に手を着けることは疑ふべからざることなり
 扱是れより臺灣と露西亞との關係を述べん臺灣は露西亞に對して支那海及び日本海の日を占む故に英國が此に據るときは露國の南下を押へ印度香港其他亞細亞領土の安全を保つことを得可し去れば何れの國にても將來東洋に於て事を爲さんとして此處を占領する事を得ば東洋に覇權を振ふことを得るは恰も歐羅巴に於て「コンスタンチノープル」の位置を占むるに異ならず
 然らば次の問題は臺灣には少しも缺點無きや否やと云ふの一點なり然るに又大なる缺點あり何かと云へば臺灣には一も良港無き事是なり試みに現在人の知る所の港を擧げて見れば淡水とか雞籠とか打拘とか臺灣とか是等のものに過ぎず然るに何れも大軍艦を容るゝに適せず此點に至つては實に一大缺點と云ふ可し併しながら臺灣に附近せる所の澎湖島ありて其島は誠に良好なる港を有するが故に臺灣に依て事を爲さんとする國は如何にしても先づ澎湖島を其手に握らざる可らず現に佛蘭西が支那に對して戰場を開きし時にも先づ此處を軍艦の根據地とはなしたり

然らば我邦の大島と臺灣とは如何の相違あるかといふの問題となるべし。我邦の大島は數多の港を有せり例へば名瀬とか焼内とかの如きは随分軍艦を入るに足るの港なり其他の港灣は測量圖に悉しく記したれども先づ大島を臺灣に比較し見るに此大島は我邦の形勢上より誠に注目を要する處にして是れは前に述べし如くニカラグ運河の航路并に桑港の航路及びヴァンクーバーの航路等孰れも大島の傍を通過し加之南亞米利加よりカローに來るにも此處に寄らざる可らず故に此大島に日本の軍艦を備へて充分に此航路を押へ付くることを得るなり今一つは露西亞にして露西亞が南下して香港を衝かんとする時に大陸と臺灣との間の航路を避くれば必らず大島の邊に出でざる可らず去れば是れも亦大島にて押へ付くることを得るなり又其一つは前きに述べたる英國の緬甸鐵道成就し楊子江を下つて上海の出口に繰出し來る所の援兵も亦此處にて香港との策應を絶つことを得可し凡て今日の如く世界の航路縱横になる以上は其線路の要處を押へ付くることは最も必要の事にして是れは歴史上より調査するも明なり拿破崙一世か一度埃及を押へ付けたるに歐洲各國大に恐れ千八百十五年維也納に歐洲各國會議を開きしに英

國は最も此の事に着目し夫のマルタを取り喜望峰を取りマルチヤス島を取りヘルブランドを取ると云ふことを持出したりしが是も全く其航路を断たれんことを恐れてなり以來航路を断つての政略は益す起りしものなり其後英國が紅海の喉首なるサレチヤス島を取り東に來りて巨文嶋を取りしも皆此意に外ならず而して世界の航海事業の一大進歩を現はしたる今日に在ては益々航路横断と云ふことは歐羅巴各國政治家の考ふる處とはなれり因て今日世界の海洋に浮んで居る船數を調査するに船數は三萬五千二百二十四艘噸數は凡そ二百九十四萬三千六百五十噸あり其中船數の三分の一は英國の所有にして更に噸數より見るも其一半は英國の所有する所たり然るに船數の進むに従つて英國にては海軍にて商船を保護する軍艦の比例大に相違するに至れり例へば千七百九十三年には英國の船數は一萬六千八百艘噸數百五十八萬九千噸なりしが其時巡邏艦にて商船を保護する割合は一艦にて百八十五艘なり然るに千八百十四年には商船の數増加して二萬四千四百十一艘噸數は二百六十一萬六千五百五十一噸とはなりたり因て之を保護する所の巡邏艦の割合は每一艘にて商船四百八十九艘となり降て千八百八十八年の統計にて見るに商船

の數三萬六千七百二十五艘其噸數九十三萬五千五百十二噸なり然るに是れ丈の船を保護するに僅に四十二艘の巡邏艦あるのみ是故に商船の數と其噸數とは殖へる丈之を保護する處の軍艦の數進まざる以上は必ずや航路の要處を押へ敵船を退め商賣を妨げ而して己の商船を保護するの力を養はざる可らず即船數を増加することを得ざる代りには要處を押へて敵の航路を斷つことは今日益々必要を感ずる所なり故に將來加奈太なり桑港なりニカラクナなり西伯利亞なりの航路を斷切ること日本に於ても今日より充分注意し置かざる可らざることなり

次に外國が日本に對して事業を爲す時には此大島は如何なる位置に立つかと云ふことは必要なる問題なり從來我國に於ても必要なる土地と考へらる處には警備隊を置き時に依り軍艦を置き砲臺を置き而して堅固に防禦したりしが大島には警備隊も無く軍艦をも送らず今ま試に大島と對馬とを比較し見るに同じく外國より占領せらるゝものとすれば寧ろ大島を取らるゝ方我の喉首を扼されるに至らざるか而して今日軍艦の有様を見るに凡て一地を發してより一週間か八日ならでは沖に居ること能はず故に今日では人の國に攻入らんとするには如何にして其攻入る

可き處に足掛り無くんば能はざるや前に述べし如し現に先年佛蘭西が支那に對して仕事を爲したる時も臺灣を足掛りに取りしなり於是か外國が日本に對して南方より襲來するには第一番に余の故郷の近傍なる五島か或は大島に目を着けるに疑ひなし殊に大島に着眼することは疑ふべからざるの事なり何故かと云ふに大島は實に太平洋に遣入り支那海に遣入る處の牆壁にして今ま例へば一國ありて日本を衝かんとするにも又九州を廻りて太平洋面に出でんとするにも此の近傍を通過せざれば出ること能はず故に此處を押へれば彼れをも是れをも制するの位置を含むることを得へし余は前會に於て對馬の事を演べたりしが西にしては對馬南にしては大島これ西南の牆壁にして即ち對馬は日本海の南の出口を扼し居れり萬一對馬守りを失ふの時は大島で喰止めて太平洋に入らしめざるやうにし又南より來るものは無論此大島に於て押付けざる可らざるなり

又今日世界に於ける航海事業の進歩と并に航路の止まる處の繁盛に赴くことを判斷したる以上は一朝事あるの時は航路を斷ち諸國の商船を押へ付けるといふことは豫め考へ置かざる可らざることなり然るに是れは萬國公法上の問題にして公法

上にて商船を押へ付けることを得るや否やと云ふことに至ては各説あり即ち亞米利加の如く軍艦を多く持たざる國は戦時にも商船を押へ付けること出来ざるものと主張し之に反して英國の如きは全く反對の意見を有し居れり亞米利加の決心は兎も角も今日の如く此問題が決せざる以上は日本たるもの亦之に應ずる位置を取るの覺悟あかるべからず然るに我邦にては大島に對して更に何の備もなく世には或は此の如き小島に對して多く力を盡すの必要なしと云ふ人もあらん併しながら決して然らず試に地中海を觀よ英國は其喉首を二ヶ處即ちマルタとツナラタルとに於て強國に押へ付け而して其マルタは如何にと見れば我邦の大島よりも尙ほ小なる島に非ずや其上商賣とても大島より甚なき處なり然るに此處に陸兵のみにも五千八百六十一人を備へ船渠も大なるものを築き又其ツナラタルとても商賣の利益あるに非ず然るに此處にも陸兵五千四百十人を駐在せしめ大なる堅固の砲臺を築きて之を守れり去れど大島の如き一方に偏する小島にても又商業上の利益甚きにせよ東洋の形勢を控制するを得可き國策的に關係したる島は軍艦をも置き警備隊をも派し砲臺をも備へざる可らず若し左もなければ他國より取られた

時の言まへなかる可し貴國として必要ならば何故それだけの用意を爲し置かざると云はるゝも他に仕方は非ざるべし現に朝鮮が巨文島を英國より取られた時も後で何程故障を言ふも無駄なりしに非ずや是れは國力の弱きは勿論なれども第一には此巨文島に備へ無きを以て直ぐに取押へられたるなり我邦の大島も又同様な運に進んも圖られず。

扱我大島と台湾とを比較するとき台湾の方には澎湖島を除いては一の軍港なし此點に就いては大島も同様なれども大島の方には亞米利加より來る航路を先づ斷つことを得るは台湾に優れるの點なり代りに南洋より支那海に入り來る所の香港へ行く航路を斷つことは台湾の方優る所あり斯かる二島の位置なるが故に若し此二島を併せて仕事を爲さんとせば東洋の形勢は全然此處にて控制する事を得るに至るべし去れば此二島を有するは取りも直さず歐洲にてコンスタンチノールを扼つたといふに同じきなり若し露西亞がコンスタンチノールを取るとせば中央歐羅巴杯は益々弱りに弱つて而して露西亞は歐羅巴にて威權を逞するのみならず是れより直ちに亞非利加にも亞細亞にも充分勢力を伸ばすことを得るに至るが故

に各國舉つて露西亞がコンスタンチノールを取ることと反對するなり去れば東洋の形勢上より臺灣及大島を取ると取らざるとは他日東洋の覇權を握ると否らざるとの分るゝ所の問題となるべし斯く論じ來たれば第一我邦の外交上に於て臺灣の事は歴史上如何の關係あるかと云ふことを探究せざるを得ず又次に外交上の問題考へざる可らずとは如何にといふに此まで演べ來つた所は地理上及大勢上よりの觀察なれば是れより外交上日本と臺灣とに付ては如何の關係を有し居るか云ふことに論及せざる可らざるなり

今臺灣の歴史を調査するに千四百三十年前には此かゝる一大島の南支那海に在りしことは支那にも知られざりしものゝ如し然るに千四百三十年に支那の一船が暴風に逢ひ此處に漂着し始めて臺灣のあることを知り得たるなり其後千六百二十年に日本の船が此處に到りて之れを占領したりし事あり是れに就て面白い話あり其話は佛蘭西人の著した書物より見出せしが佛蘭西人は果して何に據て之を著せしやと思ひしに今副島伯の話によれば原書は臺灣府誌とか云ふ本に原ついたるものにして扱其の書に據れば千六百二十年に日本は臺灣を取りしが當時會、和蘭人は貿易

易の爲め日本に往來して和蘭人は日本に對し此臺灣に立寄りて食物を積み萬事日本との貿易の足繼場になんことを日本人に請ひしかども日本人之を許さざりし是に於て和蘭人は一策を抜出し左ほど廣い土地を欲するにあらず但だ牛の皮一枚大の土地を得れば是れりといふ然らば之れを與んとて許したりしに和蘭中々狡猾にて牛の皮を糸の様に切り長き紐となし此紐にて一地を取悉き其取悉いただけ土地を悉く取りたれば日本人は大に困りしも併しながら日本人の天性として極く淡泊なる性質なるを以て終に之を與へたりと云ふことを其本に記載せり此事は或は呂宋のニラに於てありし史蹟ありといふ説もあれど先づ此歴史は斯くの如く傳へたり其後千六百三十四年に和蘭人が和蘭城といふを築きて之に據り其後千六百六十二年に至りて夫の有名なる鄭成功が悉く此島を奪せり此鄭成功と云ふ人は余と同郷の人なり最初鄭成功の父芝龍といふ人は余の故郷平戸に來り田川氏を娶り鄭成功は其生む處なり而して其和蘭人を放逐せしは悉く攻取る前數年即ち千六百五十九年なり其扱其後今の清朝に至り引續き支那の屬島とはなりしなり尙ほ此島の史蹟を尋ねれば是より復か降りて千八百六十七年に亞米利加の商船が臺灣

に航して彼處で土人の爲めに殺されし事あり因て亞米利加より遊征軍を發して之を征し而して近く此臺灣と日本との關係は則ち此の征臺の役なり

明治四年即ち千八百七十一年に日本の琉球人六十九人船上風波に逢ひて臺灣に漂流し其中六十六人の生存者の内五十四人は此島の生蕃の爲めに殺害され幸にして其中の十二人だけ生きて琉球に歸るとを得たり翌五年九月琉球の蕃王は使臣を上京せしめて琉球人が臺灣に於て生蕃の爲めに殺害に遭ひし顛末を訴出でしが其時外交の局に當りたるは即ち本會の副會頭なる副島伯爵ありし當時恰も他の外交上の問題起り伯は支那に赴かれんとするの折柄なりしが故に併せて此暴殺事件も亦清國政府に照會せらるゝ手續になりしものゝ如く思はる扱伯は六年三月軍艦に乗つて本邦を出發せられ遂に北京に入りて夫の支那と各國と外交始まりてより百年間を経るも未だ出來ざりし謁見の問題を立どころに裁決せられたり是れ外交上に取り日本の爲め空前の名譽ある事業なり併し是れは他の問題なれば此には精しく述べずと雖も此事業たる日本人が一刻も忘る可らざる事と思ふなり扱此謁見の問題并に其他の要項中の一には臺灣事件も加はりたるものゝ如し是に就いて日本よ

り支那に對して單に臺灣の生蕃を討すると云ふことを通知するに留りしが如し蓋し是時に至るまで各國より來れる在日本公使も又支那の政府其れ自身も餘り臺灣に重きを置かざりしなり副島伯が當時支那に赴かれし事を記したる適清概略の中に此日本の全權大使と北京駐在英國公使との談判を記載したり扱其六月八日の條下に英國公使の言として左の如く記せり

英公使來テ話餘問テ曰生蕃ノ事宜ハ吾輩日來尊誨ヲ聽テ皆了解テ得余ハ已ニ貴意ヲ以テ本國政府ヘ心得ノ爲メニ報知セリ然レモ萬一清ノ政府ニテ彼地ハ我ニ屬シタル故政權必ス我ヨリ加フヘント云ハ、將々之ヲ如何セン大使曰此權清ニ在リト云フヲ得タルノ證據アリ生蕃ノ地へ清ヨリ曾テ官吏ヲ派シ置ケルナク地圖ニ生蕃ノ地名ヲ點載セス且數年前米人生蕃ト戰フ曾テ清ニ告ケス生蕃亦人ト

是に由て觀れば支那政府が臺灣は我所屬なるが故に我政權の下に在らざる可らざる以上は日本自から之を遠征することは當時の英公使も先づ同意せしものゝ如し是に因て考ふる時は英公使の此言は當時在北京の各國公使等の輿論に非ざりしが

如しと思はる適清概略に依て見れば彼我の談判整はず大使は將に袖を拂つて北京を去らんとするに隨んで支那政府に對し臺灣の事たる元と我國の良民が貴國の國民に殺されしに依るなり然るに貴國は之を罰せざるが故に我國にて之を罰せんす今ま貴國を去るに臨み一言御通知に及ぶと斷言せられたり是時支那政府は之に對し全體臺灣には二種の蠻民ありて従前より王化に服し居るもの之れを熟蕃と云ひ府縣を置き之を管轄して居るなり去りながら未だ王化に服せざるものあり之を生蕃と云ふ生蕃は是れまで屢害を爲せしことあれども未だ之を治すること能はずと云ふ返答をなしたり是に於て此方より貴國化外の地を征するなれば全く貴國に關係なしと云ふ掛合を爲すべし然るときに清國が生蕃の暴横を征せざるは我政敵の及ばざる所なればなりと云ひしものゝ如し因て當時の日本政府は其土地は支那化外の地方なるが故に我自から征伐して暴殺の罪を正す可しと云ふ名義を以て臺灣に遠征軍を出せしといふ手續なるべし此處にて今一つの調査すべき事は當時の支那在留外國公使及び日本國民の舉動なるが是に就き露西亞及び亞米利加の公使は非常に反對したりしが如くいへど余の取調は遂に正確なる事實を得る能ざりき何

にせよ斯の談判の結果に由りて征臺の舉は始まりたり今の西郷中將之が都督となり兵を出し赤門の戦に勝つて遂に彼の生蕃を平らげたりき然るに此時に至り支那政府は突然故障を云ひ出したり此關係は余には能く解する能はずと雖も或は當時北京在留の各國公使の間に其問題起り隨て支那の注意を惹出して此に及びしものゝ如く思はる是れ全く余の想像なり兎に角支那の形迹上之に反對したるは事實といふべし於て是か日本よりは諸君も知らるゝ如く故大久保侯が全權大使として支那に談判に出掛けられたるなり此談判の手續は今略して茲に述へずと雖も亦一時談判不調といふに至り日清の戦を見る可き勢にまで及びたりき併しながら此際北京在留の英國公使のワード中に在り調停を爲したるが爲め臺灣の結局遂に平和に歸したるなり今ま當時の結局と及び條約書を見て日本人が將來臺灣に對する日本の方針を考へざる可らざることは太だ切要の問題といふ可し扱其條約は三ヶ條あり且つ其れに附屬の宣言書あり其趣意は
何れの國民と雖も害に遭へば保護を受く故に何れの政府と雖も自國々民の生命等を保護する爲めには適當の政略を執るは當然の事なり若し其害他國に於て起りし

ときは起害の國は被害の國に對し相當の償金を出さざるべからず臺灣の蠻民は日本國に對して殺害を施したり故に日本は一意此蠻民を討するの目的を以て兵を臺灣に用ゐる今や之を引上るに際す支那たるものは將來臺灣に於て再び此の如き暴擧の起らざる様即ち政權を及ぼして此地を治むるの責任を取るに就き茲に三條の約を立てり

第一條 日本が臺灣征討の擧は日本の國民を保護するが爲めに用ゐたるものにして正義の仕方即ち義擧と認め支那は之を不正の擧としない

第二條 支那は殺害せられたる日本人の遺族の爲に扶助金を拂ふ

日本より道路を造り家屋を建てる等臺灣の爲めにせしものは支那の用となるもの故に之に對して相當の金を拂ふ其金高は別款を以て極む可し

第三條 此條約によりて從來往復の公書を皆取消す

爾後臺灣の生蕃に對しては支那より充分に政權を及ぼす可し今後支那は航海者などが生蕃の爲めに害されぬやうに何處までも保護す可し

是其條約面の趣意にして此條約の注解は日本より臺灣に對するに餘程面白き問題

なり是より余は一己の考へを以て此條約を批評せんと欲す扱此の征台の擧たる以上の順序にて何處までも日本のなしたるとは正當の義擧にして是れに對し支那は不正なりとなさす然れば今後右と同一の事件起りし時には如何若しも當時日本が遠征軍を出せしは支那の主權を犯せしものなりとか或は不正なりとか兩國相互に見認たりとすれば格別日本は勿論支那即ち其土地の所有者さへも不正ならずとせし以上は支那政府が將來臺灣を政權の下に置いて能く之を治めすして今後航海者復たび生蕃の害に遭ふが如き場合に遭遇せば此の條約は反故となるにあらざるや故に此條約は單に文面上に止めず日本たるものは支那をして能く其實を擧げしむることを注意せざる可らざるなり然るに臺灣の現状を見るに其東海岸即ち彼の生蕃には尙ほ支那の政權及ぼして屢々叛亂起るあり彼の三年に一度の風波五年に一度の叛亂との謠は以て支那が充分に之を服従せしめざるを證するに足らん日本が十八の部屬を討平し日本の國旗を掲げし後は蕃民等は大に我國に服従し西郷總督が軍を卒めて歸るに際して土人等は涙を揮つて別を惜み其の後我が恩威を懷づき今尙ほ我國旗を家々に掲ぐと云ふ批評を下すときは概ね斯の如くなるが故に臺灣

に對する日本の位置及び將來不幸の場合等に際しなば之に處する方法は確乎なる方針あるべく又た外交上の臺灣歴史は大畧此くの如し苟も外交に志あるの士は能く此邊を調査して異日の用意をなさざる可らざるなり

今大勢上より論ずれば臺灣の位置は即ち東洋のコンスタンチノールとも云ふべし故に日本は國策的の眼を以て此臺灣に最も注視せざるべからず然るに日本今日の仕事は大に怠らざると云ふべきか東洋の大勢上より觀察を下さば日本の爲す可き仕事は實に小少にあらざるを知らん之に就き余は東方策に於て論じて曰く日本が東洋に於て事をなすには同盟をせざるべからずとは此頃非常に流行する所の語なるが如く同盟をなすとしても先づ我は我たりといふ位置を立てざる以上は同盟等は容易になすべきにあらず扱之を立つるには例へば大島の如き地理は勿論或は臺灣に近き宮古島の如き或は北西の峽日たる對馬の如き苟も我が東洋に對して大利害を有する地には充分之が準備をなし而して先づ我といふ位置を充分に固め何時何國と同盟をなすも決して國家の不利益を來たさざるに至り而る後ち始めて大事業をもなすべく亦た同盟をもなすべしと雖も若し否らされは同盟等は極めて不得

策あるものあり

歐羅巴の現勢を見に英國は獨り獨塊伊の三國同盟或は佛露の兩國同盟外に卓立せり而して英國の爲す所は如何と顧るに嘗て余が演說せし如く獨塊伊の三國は三國同盟條約を結び佛露の兩國は兩國同盟の條約を結びしとき英國は獨り平然として此十九世紀の世界に當つて同盟を稱し條約を結ぶも紙上の空文何かあらんと英國の宰相は公言したり而して此英國が彼方に與すると此方に同するとは歐羅巴洲形勢の判るゝ所にして斯かる位置を英國が歐洲に於て有するは何ぞや是れ決して英國の虚勢のみにあらず即ち英國の實力は同盟を爲すと否との權を我に有するの結果たるなり故に英國の歴史を讀まば或時は佛蘭西と同盟し或時は奧太利獨逸と同盟したることありて畢竟其時の機會に乗じ時勢に應じて動けり是れ獨り英國のみならず其他の國と雖も常に意を此に用ひ合縱連衡なせり今東洋に於ても露西亞と同盟すべし或は支那或は英國と結ぶべしとは一の流行なりと雖も併しながら我と云ふものを立てずして他と同盟をなさば徒に他の手先に使はれるのみなり現に其證とすべきは露西亞が千八百七十八年に土耳其に對して戰端を開らきバルカ

ル半島を下りしとき其の衝に當りしルーマニアは露西亞と同盟をなし戦勝の上は充分に利益を分つべきを約したり時にルーマニアは我を頼むの用意は更になくして此の同盟をなしたるに露か土耳其を敗りし結局サンステファアの條約にてルーマニアは利益を得ざるのみならず却つて其の最も豊富と頼みしベッサラビアを露西亞に奪はるに至れり人の爲に使うものは凡て斯くの如きものなり故に我と云ふものを立てざる以上は同盟は却て害を招くの基となるべし余が歐羅巴漫遊の際一日ルーマニアの首府ブカレストに行きしに府の周圍は悉く砲臺を以て回らされたり余は其の何故なるかを問ひしに一朝事ある時に我といふ位置が立たざれば以前の如く同盟をしても再び人に使役さるゝのみならず却て其土地をも失ふに至るが故に豫め之が準備をなせしなりと其他丁抹の首府コッペンハーゲンに至れば歐羅巴大國の間に挾れる此首府は一里の四分の一の臺場を築き第二には浮臺場を設置し大國に對して我と云ふ位置充分に保持すべきの用意をなせり故に歐羅巴に至り能く其形勢を察するときは凡そ是れ位の計畫をなせば何處までは爲し得らるべしとの尺度も自から判然たるものあり今東洋に於て大に事を爲さんとするにも

始めより何國と同盟して何國を敵となすべしと定め置くが如きは非常の不得策にして其の自から恃むべき我か位置を確立し一朝の變亂に際するも人を恃みとせず我は我一人にて動くべしとの決心さへあらば天下何事か成らざるものあらん而して我日本に於て之を確立し此の決心あらば其の一舉一動は大に世界の注目を惹くべく又以て東洋の大勢を控制するに至るべきなり然るに今日の如く萬事を緩怠に付し去り徒らに連合を説き同盟を謀るは實に誤謬の甚しきものにして斯の如くんば却て害を招くに至らん畢竟するに自立を先にし同盟を後にして着々國策的事業を進めなば東洋に對しても世界に對しても外交上自由自在の運動をもなし得べく東洋の大勢を左右するに足るの位置に達すべきは余が誓て保證する所なり

明治二十五年九月十五日印刷
全 年全月十六日出版



定價金六拾五錢

著者兼
發行者

東京市麴町區下六番町四十四番地
稻垣滿次郎

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目
廿三番地
根岸高光

發行所

東京市本郷區本郷六丁目五番地
哲學書院

特約販賣所

大坂 松村九兵衛
東京 小林新兵衛
大坂 梅原龜七
熊本 長崎次郎

東京 秀英舎印刷

第三章 鐵道線路

西比利亞鐵道線路之圖

第四章 此鐵道より起る利益一斑

第五章 運車速力

第六章 鐵道施設費及營業の收支精算

第七章 鐵道の將來

第八章 英支兩國の露國鐵道に對する策

第九章 日本の西比利亞に對する策

附 錄

- 第一 露國鐵道(露國官報)
- 第二 西比利亞鐵道(鐵道) (タイムズ通信)
- 第三 貨幣度量衡比較表

四版 東方策 第一編

目 次

日本及太平洋

定價 四十錢
 郵稅 六錢
 紙數 二百餘頁

亞細亞に對する英吉利の外交政策 英國と波斯との戰爭 英國と支那との戰爭 支那に對する露國の外交政策 英國新嘉坡と香港との併存す 又ラナンと巨文島を占有す 日本帝國の地形國勢及び其富源 英國の支那と親親同盟の研察 現今太平洋に於る英國の勢力 魯西亞は蒙古滿州を貫通し延て太平洋に出で東洋諸國をして危運に懸かしめんとす 西比利亞鐵道を利用する日本の政策 英國の西比利亞鐵道に對する二大政策 日本帝國は太平洋の雄嶺なり 日本の廣狹人口の多寡 其國力發達迅速 日本の地形位置 巴拿馬運河開鑿の我商業上に及ぼす效果如何 加奈陀太平洋鐵道は東洋に至る英國の最捷路 支那鐵道の計畫 日本將來の工業 南方太平洋に於ける英獨兩國の競爭 英國及び其殖民地に對する英帝國の協同一致策 臺灣島は東洋の最要地 近時海軍々零の一策 魯英二雄邦の外交政策消長の比較 英國海軍の親熱は北方太平洋に在り 英魯二國將來太平洋に於ける衝突競爭、其成敗果して如何 我日本帝國は太平洋の主權者たるを得べし

附 錄

第一 英米二國の商戰

何をか字内の強國と云ふ 世界商工業零史 英國は字内の商業工業の中心を占有す 米國之進歩 米國は英國の商工業の中心を奪ひ去んとす ャンケンリー海關稅則 米國の貿易的聯邦組成 之に對する英國政策 此英米二國商戰勝敗の制權者は我日本帝國なり

第二 東歐諸國の聯邦

東歐諸國及歐洲中央諸國の之れに對する政策 東歐諸國の聯邦にして組成せしむべきや否や 此聯邦の親善は魯國の國策 歐洲中央列國英、佛、澳、匈、のなる乎 東た聯邦中の一なる乎 勃爾俄利、希臘、塞爾維、羅馬尼、現今の形勢 土耳其國は亡國也 日本人は東方問題を研究せざる可

再版東方策 第貳編

定價 四十錢
郵稅 六錢
紙數 二百餘頁

目次

東方問題

第一章

第十六世紀第十七世紀及第十八世紀に於ける英國の外交政策
西班牙帝國の興敗 英吉利和蘭二國の商業上競争及び其政策 佛國の興起—之れに對する歐洲大同盟 西班牙國王位繼承の問題、及び「ボナパルト」系統の同盟 佛國の王位繼承戰爭英國の之れに對する政策 七年の戰爭 亞米利加戰爭及び拿破崙戰爭の間に英國と「ボナパルト」系統同盟との紛争の再發

第二章

彼得大帝カザンとニウ及び歴山一世治政間の魯國の外交策
彼得大帝カザンとニウ海に魯國の勢力の基を創建し、且つ歐洲北方列國及び海上の權を有する諸國と相敵シカザン二世及カトリックの諸國の同盟 波蘭第一の割奪分取 魯西亞を黒海に達するを得たり魯國の同盟に對する、土耳其を保護するピョートルの政策 波蘭第二第三の割奪分取 魯國の勢力の振興

歴山第一世の政策及び土耳其の對峙しての勝利、カザンの條約、ニコラエフの平等條約、ピョートルの列國會議、東歐に於ける佛國權力の顯揚

第三章

歐洲諸大列國の條約同盟
歐洲諸大列國の條約同盟及び其目的、此政策は各國が各自に小國を保護するを無んじて其條約政策を執らざる國は小國に對する暴行を停む、此條約政策は土耳其の問題を解き去る乎

第四章

希臘國之獨立
歐洲大國の條約同盟 希臘の謀叛 英魯佛三國の干渉、ナバチノ戰爭、アンキイナアイキールシイの條約 英佛二國の助けに依て土耳其其亡滅を免る巴公はカンニング公の政策の繼續者たり

第五章

クリミア之戰爭
魯國ニコラス一世、埃及の問題を以て英佛の和親を破らしめんとす、メヘンツ、マンロー王及び巴公の彼に對する政策、ニコラス一世英國に遊ぶ、カトリック(耶魯義生地)保護問題、魯佛の和親條約に破れんとす、英魯二國土耳其分取の議、魯土の戰爭、「ピヤナント」外交宣言書、土耳其を助けんが爲め英佛二國の干渉巴里の條約、魯國の失敗、宣戰に付巴公アハリアン公間の通信、英國國民の感情人心は巴公の政策をして成らしめたり、クリミア戰爭に英佛同盟の成りたる原因

第六章

黒海に關する各國會議

魯佛戰爭に依りて佛國其國勢を失す 魯國黑海禁艦に關する箇條を抹殺す 歐洲の形勢、魯國の欲望を屈挫するに能はず 龍府各國會議 魯國黑海の權を復す 英國政策の誤點 日耳曼アルサス、ローレンス二洲の占領は歐洲列國々勢の平均を一變す

第七章

千八百七十八年魯土の戰爭

勃爾俄利國に於ける慘虐 「フンドレンスベリ」、ノート「アンヤル」伯の外交宣言書、英國其書をして無効たらしむ 伯林宣言書 英國の反對 魯國土耳其と戰爭の用意及君斯丹丁堡に於ける各國會議 土國新憲法—魯土の戰爭 サメステノフの條約 歐洲各國の干渉 列國の伯林會議 最終平和の條約

第八章

伯林條約の批評

當時の事情 サリスベリー、レタペロウ二公之秘密條約、及び其伯林會議の決議に及ぼしたる結果 魯國の所得 英吉利地地利二國土耳其の後見國となる 埃國有爲の政策及び「塞爾維」にて失策、勃爾俄利に於ける得策 埃國と魯國との關係 小亞細亞の終局法 魯國の局外中立甚危し 君斯丹丁堡の魯國に必要なる所以 英土の條約 小亞細亞に於ける英國の政策甚微細なり 埃及の問題 地中海より波斯灣迄の鐵道に依りて印度に到るの路 英國の君斯丹丁堡に於ける關係

第九章

中央亞細亞の問題

印度に於て英國の勢力擴張 佛國の競爭 拿破崙一世の目的 中央亞細亞に於ける魯國勢力擴張

クリミア戰爭後、魯國の威權擴張 印度攻撃の要地 魯國が中央亞細亞に施す政策の目的は土京君斯丹丁堡に在り 魯國近時の糧食并ひに鐵道 パルカン問題に對する亞細亞問題の反動 現今埃國の危險 魯國が亞細亞に於て將來侵略すべきの地 英國の良策は地中海より波斯灣に鐵道を布設し、印度に到るの捷路を開くに在り 英佛埃土伊の大同盟は魯國の大欲望を防制するに足るべし

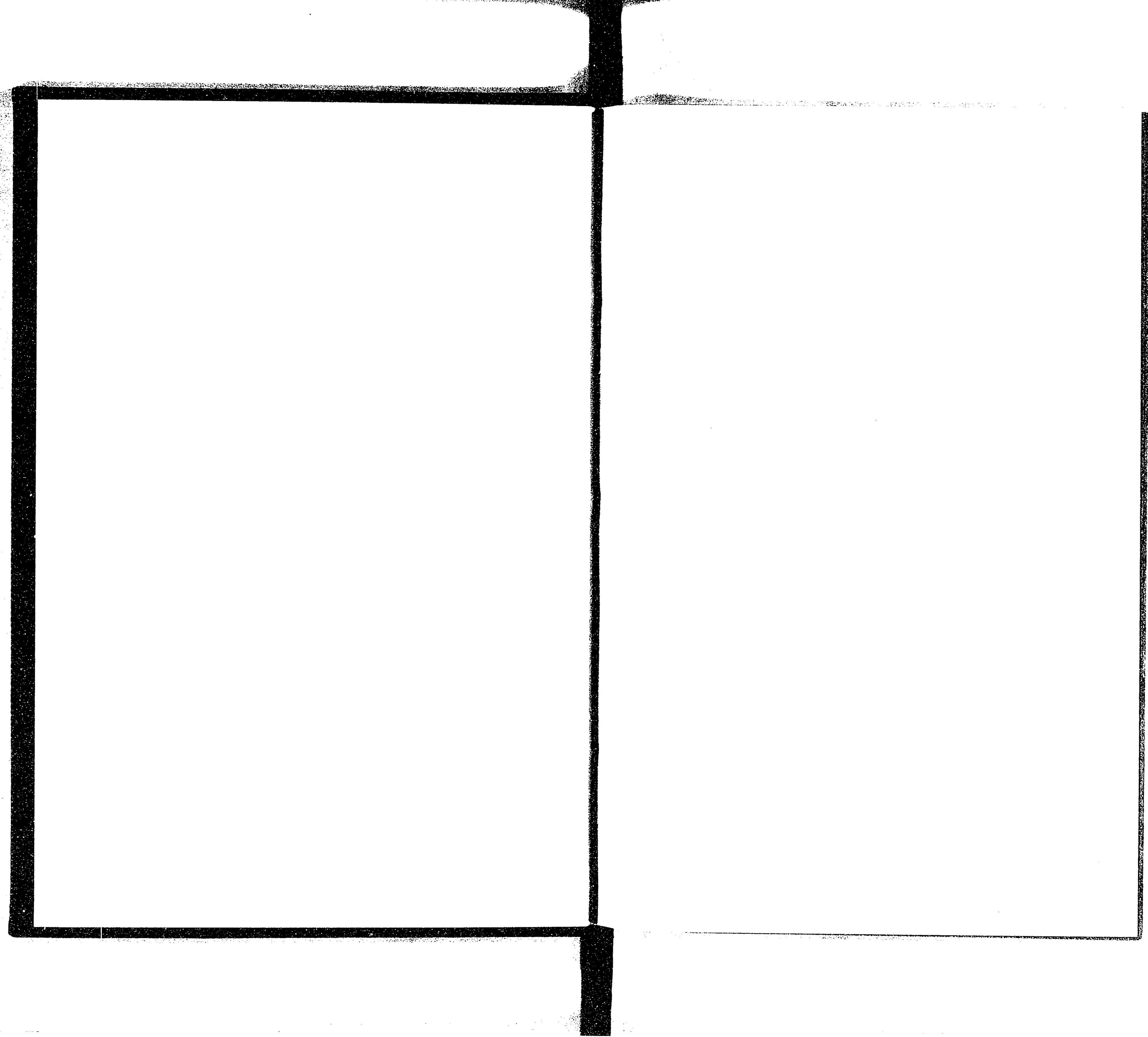
地圖目錄

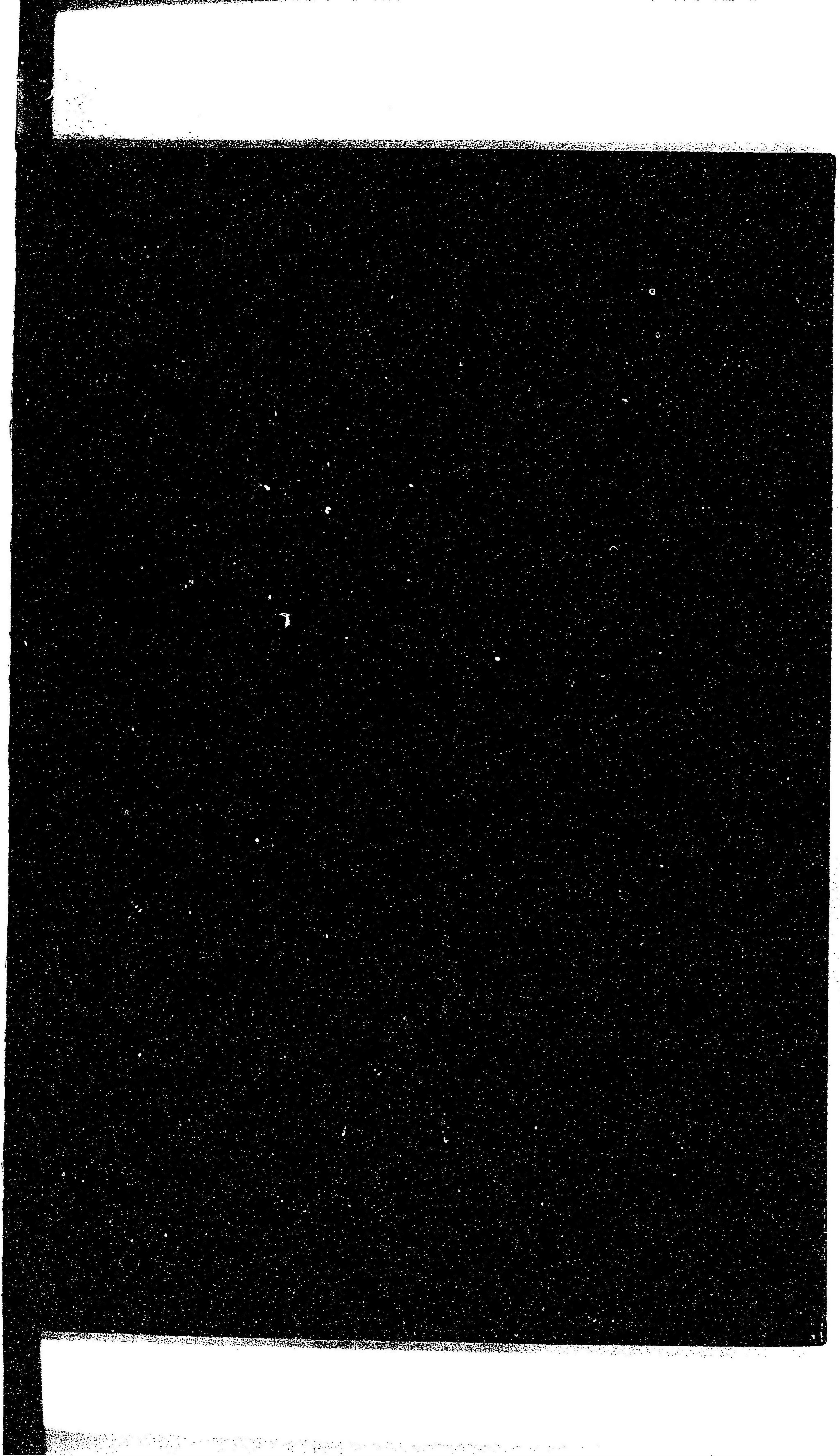
- 第一 日本及北太平洋之地圖
- 第二 太平洋及其諸航路之地圖
- 第三 歐洲に於ける魯西亞侵略之地圖
- 第四 東歐羅巴及西亞細亞之地圖
- 第五 亞細亞に於ける魯國經過一斑之地圖
- 第六 西比利亞に於ける魯國侵略之地圖



Vertical text on the left side of the page, likely bleed-through from the reverse side. The text is extremely faint and difficult to decipher, but appears to contain several lines of characters.

法政國第一課
34.3.31
調查立法考査局





319.2

I 374 t2

029553-000-0

319.2-I 374 t2

東方策結論草案 上卷

稻垣 滿次郎/著

M25

BAG-0100



